

談 話 室

終 着 駅

秦 隆 昌

「終着駅」という言葉が日本で使われ始めたのは、ヴィットリオ・デ・シカ監督の往年の名画が封切られて以後のことではないかと思う。この映画の評判に加えて、その題名の「終着駅」という言葉がまた当時の日本人には非常に受けたい。このため国鉄の案内アナウンスの用語が、それまでの「終点」から、この「終着駅」に変えられた程である。この言葉は情緒性に富み、哀愁を含んでいる。それが日本人受けしたものである。

所で、私はヨーロッパの鉄道に乗ってみて、この「終着駅」には私の全く知らない意味が含まれていることに気が付いた。1971年7月2日のことである。私は友人に会うためにスペインからイギリスに向かっていた。前日の午後7時にマドリードを出た寝台列車が終着のパリ・オステルリッツ駅に着いたのは朝の9時50分頃であった。そこからは更に列車を乗り継いで、ドーバー海峡に面したダンケルクに向かい、イギリスには船で渡る予定にしていた。ダンケルク行きの列車の発車までには未だ充分時間があったが、その始発駅であるパリ・北駅に、とりあえず荷物だけは運んでおこうと考えた。所が、オステルリッツ駅と北駅を結ぶ、日本でいえば国電のような乗物がないことがここで初めて分かったので

ある。日本人なら、例えば新幹線で新大阪から東京に行き、更に上野から東北本線を利用する場合、東京―上野間には当然連絡の国電が走っていると考えるに違いない。しかしこの常識はパリでは通用しない。私は仕方なく重い荷物をさげて駅の外に出て、タクシーを拾い、北駅に向かわねばならなかった。ここで分かったことは、ヨーロッパの「終着駅」というのは単に一つの列車の終点を意味するだけでなく、本当にそこで線路が切れていて、そこから先へは進めない構造の駅をさしていることである。フランス語にはこの終着駅を表わすのに *gare terminus* の他に *gare en cul-de-sac* 「袋小路の駅」といういい方もある。その目で見るとヨーロッパの主要な駅は殆どすべてこの種のものである。映画「終着駅」の舞台となったローマの中央駅もその例外ではない。イタリア人はこの駅に *Stazione di Termini* という名前をつけている。

termini は「末端」「終点」という意味の名詞 *termine* の複数形で、従って *termini* 駅は幾つかの線の「終点」が集まっている駅の意味になる。勿論「終点」というのは逆方向に見れば「起点」にもなる訳で、「終着駅」は同時に「始発駅」でもある。イタリア語の *termine* の関連語であるラテン

語の terminus はもともと所有地の境を示すために地面に立てられた「境界石」を意味した。従つて terminus は先ず「中心から離れた末端」「周辺」を意味していたが、次第に「行きつく所」「目ざす所」「目標」という意味を合わせ持つようになって来たらしい。ローマの termini 駅はムッソリーニの置き土産といわれているが、この駅名には、日本人が「人生の終着駅」といった表現から感じるような落日のイメージは含まれていない。その駅はすべての活動の中心であつて、人々がそこを目ざして集まって来る場所なのである。termini 駅という名前にはこうした誇りが込められているように思われる。

所で、この種の駅を鉄道関係の用語では頭端駅というそうである。これは恐らくドイツ語の Kopfbahnhof、フランス語の gare tête de ligne 等のようなヨーロッパ

語の翻訳であろう。駅の機能面からいえばこの訳語はかなり正確にその原意を伝えている。しかし情緒性には全く乏しい表現である。映画の題名にはとても使えそうにない。そこに翻訳のむつかしさがある。翻訳においては原語の一つ一つの語句や表現は一つ一つで日本語と対応しない。従つてその原文が伝えようとしていることを總体的に捉えた上で訳語を選ばなければならない。また逆に訳語は原語が意味する内容の一面しか伝えていないことが多い。映画の題名に当てられた「終着駅」という訳語は駅の機能面にまで責任を持っている訳ではない。

蛇足になるが、日本の国鉄は殆どの駅を「通過式」の構造にし、誇り高い、しかし機能の上からは効率の悪い termini 駅は例外的にしか採用しなかった。四国の高松駅は日本では珍しい termini 駅の一例である。

「一般教育を思い返して」

松 田 修 一

十余年前に私が受けた一般教育の感想を二点ばかり述べてみます。講義は概して、教官の講義ノートの口述を我々は必死で書き取ってゆくという形式をとっていましたが、私にはこの講義の進め方がどうにも納得のゆかないとでも奇異な現象と映りました。スローテンポな読み上げ、聞き取れない声、書き取りに専念することからくる思考停止、肉体労働による手の痺れという具合に、非効率極まりないやり方であつたからです。そして、これらすべての非能

率も、講義ノートを印刷して配布してくれれば簡単に解消し、しかも我々は受講時間内に考えることができ、教官も内容についてもっと丁寧な解説が施せるのにと考えると、教官はいかに遅くいかに少く教えるかに腐心しているのではあるまいかとさえ思われたものです。教育はどこまでも能率的でなければならず、短時間にいかに多くを望みうるかということではなければならないでしょう。たとえそのことで教官の語るべき材料が減ろうと構わない。もはや語るべ